

けたのである。

師の君に剛立がことききしより

はやもすぎたり五十年の日子いそとほ

4

先生の仙台時代の友人に柘植秀臣氏（法政大学教授・生物生理学、民主主義科学者協会幹事長）がいた。氏とやっていた条件反射研究会で、先生のお話しをうかがったこともある。この柘植氏の話しに、中国の天才的脳科学者陶烈（一九〇〇—一九三〇）の名がときどきでてきた。京都、東京にまなんだ陶はときどき仙台にもいき、陶、小川、柘植の三人の交友があった。先生からも、陶烈のことをほんのすこしきいた。一度、陶烈について小川、柘植の対談を実現させたいとおもっていたが、お二人ともなくなつて、いま陶烈をする人はいない。一九八一年五月二九日にわたしは『私説松沢病院史』をだし、九月一二日に、この本について意見をはなしていただく会をした。先生はそれに出席されて、自分も精神科にいろいろという気もあつたが、助教授にされて解剖にすわつた、脳研と松沢との野球の試合につれていかれたとき、とるのはだめだが、打撃には自信があつて代打ででた、でもまけた、といったことをはなされた。

呉秀三先生は一九三二年三月二六日になくなつた。一九八二年三月二〇日にだした『呉秀三 その生涯と業績』には、先生の序文をいただいた。三月二七日におこなわれた呉秀三

先生没後五〇年記念会は、先生が会長であつた。そのときの写真をとりにだしてみると、大先生がずらりならんでいる。ずいぶんにはなやいだ会合であり、そこでわたしに花をもたせてくださったのは先生だった。

講堂で、うつむいていた顔をあげて、「麻田剛立は、です、な」とかたりだされた先生のお顔、お声はありありとよみがえってくる。

顔あげて剛立がことかたられし

御声は今ぞよみがへりくる

小川先生、ありがとうございます。

東大脳研時代の小川先生

萬年 甫

小川先生と私とを結ぶ絆は、学生時代に先生より組織学の講義を受けるとともに、脳研（医学部附属脳研究室）で人脳の連続標本を勉強する機械を与えられたこと、卒業してからはその脳研で十一年に亘つて研究指導を受けたことであつた。

先生の卓越した御業績や御人柄については、既に多くの人の筆によつて十分に世に知られているが、昭和十九年春から昭和二十年春に至る戦争末期の一年間の脳研における先生の御

動静については、私の知る限りでは当時の関係者の全てが既に亡くなられている現在、私はその頃学生として脳研に出入りしていた唯一の生き証人として、たとえ僅かでもそこで見聞したことを記録しておくことはあながち無駄ではなからうと思ひ、そのことを中心に、それに学生時代先生から受けた講義の印象や、脳研での十一年間に先生から直接伺ったことなどを付け加えることによって、本席にお招きを受けた責を果たしたい。

昭和十七年秋から翌年三月に至るまでの医学部新入生に対する西成甫先生の肉眼解剖学と小川鼎三先生の組織学の講義は、学生全員が身を固くし耳を澄まして聞き入る、稀に見る充実かつ精気に満ちたものであった。教育者ならびに研究者の範とすべきものであり、聴講者全員にとって終生忘れ得ぬものであった。

その後、私は学生の身で脳研に出入りし、前述の一年間を過ごす機会を得た。そこで私が受けた最も印象に残る先生の教えは、「実物や標本というのはウソが書かれていない書物であり、その点どんな立派な書物にも適当にウソが書いてある。そのことを忘れないように」という教えであった。多くの研究者が戦場に赴き、ガランとした研究室を一人占めにし、先生から個人教授のようにして教えを受けたことは、私にとつて終生の貴重な思い出である。当時先生の赤核に関する研究は一段落したものの、最後に赤核破壊実験に用いられたサルが赤核症候群を呈することなしに肥満症になった。先

生は熱心にこのサルを観察されて、この現象は当初の狙いが外れて、赤核の代わりに視床下部が破壊されたことよつて起こつたと考えられたが、解剖してみると傷は赤核にも視床下部にもなく、意外にも中脳の中心灰白質に見出された。先生はこの事実から、視床下部からの下降路がここを通ると想定され、これが戦後の脳研での主要テーマとなつた。

戦後の脳研は研究者も増え、上記の自律神経系の研究や鯨の脳の比較解剖学の研究など、先生の指導のもとに、各人の研究も順調に進んだ。一日の多くを解剖学教室で過ごされる先生も、午後には定期的に脳研に姿を見せられ、御自分の古巣に戻つたようにすっかり寛いだ気分になられて、旧制高校時代のこと、樺太や千島旅行、米国や欧州の印象などを、巧みな話術で語られる機会が多かつた。

それらの話題の中で、先生の三高時代の交友関係は、その後の先生の歩みを知る上で極めて重要な要素を含んでいると見受けられた。先生は最初は植物の光合成に興味を持たれ、植物学を志向されたが、旧制の三高に進まれてから、心理学、哲学に興味を移され、それが後の脳研究に発展したのであり、それは先生の生来の資質に加え、親友西田外彦氏との交友を通じて、その父君たる哲学者西田幾多郎の存在を知り、陰ながらその影響を受けられたことも、見逃し得ない一因であつたと考えられる。また、当時の京大の支那学教授小川琢治氏の長男で、後の東大工学部教授小川芳樹氏（この小川家と先生の小川家とは無縁）との交友は、その弟の湯川秀樹

氏との面識も含めて、深く長く、そのことがただでさえ大きかった先生のものの方を一層拡大させたのではなかったろうか。先生はこの小川家に家庭的にも温かく迎えられ、これらの兄弟の生母小雪夫人には特に目をかけられ、生前しばしば眩暈に悩まされた小雪夫人が後に脳を鼎三さんに調べて貰いたいと遺言され、小川先生が京都に赴いてその脳を脳研に持ち帰られ、連続切片を作って精査されたのも、いかにその絆の太かったかを偲ばせる一挿話である。

小川先生の研究は脳から心臓へと移り、さらに一転して医史学へと拡がり、そのいづれにおいても独自の境地を開かれ、特に医史学の領域では中興の祖と仰がれていることは欣快にたえない。他方、一枚の脳の標本から百以上の研究課題を見付け出すと言われた先生が、これさえあれば研究費がなくても十五年や二十年は研究を続けて見せると豪語され、なによりも大事にしておられた脳研の宝、すなわち多数の脳の連続標本は、分子生物学の時代には無用の長物として、今日東大資料館の中で埃を被り、長い眠りについている。ブラウン管に写る虚像を頼りに殆どこのことが運ばれてゆく世の中では、標本にとっては研究室に置かれるよりはむしろその方が安全であるとも考えられようが、実物の飽くことなき観察から全てが生ずると論された小川先生の薫陶を受けた身には、長い伝統の裁ち切れたことに複雑な思いがこもるのである。

解剖学と鯨学と医史学と

浅見 一羊

小川鼎三先生が畑違いにも見える三種の学問領域で活躍されたのにはどんな必然性があったか。幸い一般向の著作も数多く遺された。とりわけ本の序文または後書きに執筆の心境を率直に述べておられる。

解剖学の関係では「脳の解剖学」という名著がある。刊行は今から五十年前の一九五一年秋、赤核の研究が学士院賞を受けたのも同年春のことであった。序文に、戦時中東大医学部の上級生に講義した内容がこの本の根幹をなすとあり、軍医として戦地へ赴く若者への想いが窺われる。本文は講義十五回の体裁をなす。第七講に「赤核に関する実験」のあらましが説明されている。研究がほぼ成就した当時の鋭気が漲るこの章を、私は幾度も読み直す。自分の眼でも確かめたくて、東大資料館に脳の連続標本を覗に行ったが、オットセイやネコの赤核はオイソレと見出せるものでなかった。第十四講「鯨の脳について」では、手足が貧弱な代わりに巨大な尻尾をもつ鯨が、体つきの点でヒトとは両極端の位置にあり、その運動は主に錐体外路性であるなど、「鯨山からヒト山を覗る」という譬えの実例である。

『鯨の話』は鯨学の金字塔と呼ぶ人もいる。脳研究の必要でイルカの材料を求めたところ、近海産歯鯨の分類学が不備